

## 真の平和の与え主である 神様に祈る

エレミヤ書29章1～14節  
2022年8月14日  
松田 基子 師

8月15日は、日本の終戦記念日です。この時期になりますと、77年前の戦争についての検証が成され、戦争のもたらす**無益さ、有害さ**が語られます。今日、世界平和が切望されているながら、現実には、ロシアのウクライナ侵攻があり、世界のあちらこちらで衝突の危機が伝えられています。戦争ばかりではありません。

今日のエネルギーの過剰消費は、地球の温暖化による気候変動をもたらし、大洪水や森林火災などの災害が多発しています。多くの人々から、

『神様が居られるのなら、何故災害を食い止め、非道極まりない戦争を、終結させては下さらないのか。神様を信じても当てにならない。神様なんかいないではないか』

との声が聞かれます。

しかし、そうではありません。聞かないのは人間の側です。聖書は、その事をずっと語り続けています。今朝登場しますエレミヤは、紀元前626年、ユダ王国のヨシヤ王時代に神様から預言者の召命を受けてから、ユダ王国滅亡の紀元前586年まで、40年に亘って、神様からの御言葉を語った預言者です。エレミヤの召命は、同胞の主なる神様に対する背信を告発するところから始まりました。

エレミヤ書の1章14節から、次の様に記されています。

「主はわたしに言われた。

『北から災いが襲いかかる。この地に住む者すべてに。北のすべての民とすべての国に、わたしは今、呼びかける』と、主は言われる。」

『彼らはやって来て、エルサレムの門の前を都をとりまく城壁と、ユダのすべての町に向かって、それぞれ王座を据える。わたしは、わが民の甚だしい悪に対して、裁きを告げる。

彼らはわたしを捨て、他の神々に香をたき、手で造ったものの前にひれ伏した。あなたは腰に帯を締め、立って、彼らに語れ、わたしが命じることをすべて。彼らの前におのくな。わたし自身があなたを彼らの前でおののかせることがないように。わたしは今日、あなたをこの国全土に向けて堅固な町とし、鉄の柱、青銅の城壁として、ユダの王やその高官たち、その祭司や国の民に立ち向かわせる。彼らはあなたに戦いを挑むが、勝つことは出来ない。わたしがあなたと共にいて、救い出す』と主は言われた。」

神様はエレミヤに、

『国の権力者たちから、民衆まで、その全ての民に向かって、その誤りを正し、北からの災いを預言しなさい』

と命じられました。神様はユダ王国を、ダビデに約束された、永久の王座を与えるために、ご自身に従うために選ばれました。それにも拘わらず、彼らは常に神様に聴こうとはしないで、自分の考えに立って、それも、自分達の判断を正しいとして、突き進んでいました。国の中枢も二分していました。

王の側近で、強行派は、バビロニアのネブカドネツアルの実力を軽く見ていました。紀元前605年エジプトはカルケミシュの戦いでバビロンに破れました。そのため、それまでエジプトの支配下にあったユダ王国はバビロニアの属国になりました。ところが紀元前601年、エジプトは力を持ち直しました。その為にエジプト派は、エジプトへの寝返りを主張しました。彼らは歴史的にエジプトとの付き合いが長く、エジプトに親近感を覚えていました。背後には彼らを支持する祭司や預言者達のグループが有りました。

もう一つのグループは、少数派ながら、冷静に事態を見つめていました。新興バビロニアの、圧倒的な軍事力を評価していました。

『これに逆らう事は自滅行為であり、エジプトは、カルケミシュの戦いでも、負けており、国力は衰退し、決してこれに頼ってはならない。今は苦しくても、バビロニアに隷属するのが

国を存続させる道である』  
と考えていました。 エレミヤは、彼らを支持する  
預言者でした。

エレミヤは、神様に背いて、自分達の利害に  
しか感心が無く、都合よく、  
『自分達は神の民だから、  
神様に守られる。 神様は自分達の  
願った通りにして下さる』  
と豪語する王や高官、祭司、国の民に向かって、  
彼らの罪を糾弾し、北からの侵攻バビロニアの  
脅威を訴えました。 エレミヤは、この様な神の  
言葉を語れば、自分は迫害を受ける事が分かっ  
ていても、神様が語れと命じられるので、彼は語  
らずにはいらませんでした。

その事によって、エレミヤは王や高官たちから  
命を狙われました。 王達は、エレミヤの進言を  
聴かないで、エジプトを頼みに、バビロニアに反  
旗を翻しました。 そのために、紀元前597年、  
ネブカドネツアルにエルサレムを包囲されて敗  
れ、王族、高官、兵士、技術者、宗教者等、バビ  
ロンに連れて行かれ、第一回バビロン捕囚が行  
われました。 その後のユダ王国はエジプトとバ  
ビロニアの間であって、宮廷政治はいつもエジ  
プト派とバビロニア派の対立がありました。

その対立の表われがエレミヤ書28章に記さ  
れています。 ユダの王ゼデキヤの治世、と言  
いますのは、第一回の捕囚が終わった後に、ネブ  
カドネツアルによって立てられた王が、ゼデキヤ  
で、ユダ王国最後の王です。

28章1節から4節に

「ゼデキヤの治世の初め、第4年の5月に、  
主の神殿において、ギブオン出身の預言者、  
アズルの子ハナンヤが、祭司と全ての民の前  
で、わたし(エレミヤ)に言った。」

『イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。  
わたしはバビロンの王の軛を打ち砕く。  
2年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカ  
ドネツアルがこの場所から奪って行った主  
の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰ら  
せる。 また、バビロンへ連行されたユダの  
王、ヨヤキムの子エコンヤおよびバビロンへ

行ったユダの捕囚の民のすべて、わたしは  
この場所へ連れ帰る、と主は言われる。 な  
ぜなら、わたしがバビロンの王の軛を打ち  
砕くからである』

とあります。

これらの言葉は、王や高官、民にとって、  
『なんと心地良い言葉でしょうか』

ハナンヤは、民に迎合する言葉を神様の名を  
使って言ったのです。 民はハナンヤの言葉を  
信じました。 15節に、エレミヤはハナンヤに  
対して、

「主はお前を遣わされてはいない。 お前は  
この民を安心させようとしているが、それは偽  
りだ」

と反論しました。 しかし、王も高官も民も、根本  
的な自分達の神様に対する罪を、一向に悔い  
改めようとはしないで、目の前の情勢に振り回さ  
れ、自分達に耳触りの良い言葉だけを拾い集め、  
それを信じ、神様の真の言葉に心を向けようと  
はしませんでした。 エレミヤにとって、ゼデキヤ  
王を初め、エルサレムに残された人々は、神様  
が言われた様に、非常に悪くて、食べられない  
イチジクのような存在でした。

一方、バビロンに連れて行かれた捕囚の民を  
神様は良いイチジクだと言われました。 そして、  
24章の6、7節で、

「(神様は)彼らに目を留めて恵みを与え、こ  
の地に連れ戻す。 彼らを建てて、倒さず、  
植えて、抜くことはない。 そしてわたしは、  
わたしが主であることを知る心を彼らに与える。  
彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神と  
なる。 彼らは真心をもってわたしのもとへ  
帰って来る」

と言われたのです。

エレミヤはその言葉に立って、バビロンに連  
れて行かれた捕囚民に期待し、彼らに手紙を書  
きました。 それが今朝読みました、エレミヤ書  
29章に記されています。 ゼデキヤ王は、ネブ  
カドネツアルに表向きは恭順を装って手紙を送  
りました。 エレミヤはその王の手紙を届ける者  
に、自分の手紙を捕囚民の指導者に渡してくれ

る様に頼みました。手紙は無事に届けられたのです。手紙の内容が4節から記されています。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。」  
捕囚民達が先ず知らなければならない事は、

『主なる神様は、万軍の主であられる』  
と言うことです。古代の戦争は、民が拝む神と神との戦いでした。その為に、戦争に負けると相手の国の神々がそこに持ち込まれ、拝まれました。しかし、それは皆、人間が造り出した神であり、何の力もありません。主なる神様だけが、生ける真の神様で、世界を創造し、世界を導いておられる唯一、真の神様です。歴史は見えるところ、力の強い者が導いているかに見えますが、彼らの支配が何時までも続くと言うものではありません。最終的には、**主なる神様が導いておられるのですから、人はその御心に従って生きる事こそ、幸いを得ることになるのです。**

その神様が、彼らに何と言われたのでしょうか。

「わたしは、エルサレムからバビロンへ  
**捕囚として送ったすべての者に告げる**」  
とあります。捕囚民達は、自分達がバビロン捕囚になったのは、ネブカドネツアルの力に依るものだと思っていました。しかし、それは目に見える状況であって、背後に世界を支配しておられる**神様の采配で成された**と言うのです。

そうであれば、ご自身(神様)が良しとされる時、また元に返して下さるのも神様です。希望が湧いて来ました。その時を待つ事が大事です。その為に捕囚の地で、

「家を建てて住み、園に果樹を植えて  
その実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない」

と命じました。既に捕囚民の間にも、ハナンヤの預言である、

『2年の内に捕囚民も、奪われた  
宝物も帰って来る』

と言うメッセージは広がっていました。しかし、エレミヤは、

『神様の御計画の御手に委ねることこそ、  
自分達に**与えられた使命だ**』

と信じていました。

『無謀な蜂起に組みする事なく、バビロンの地で一日一日を誠実に生きるように、そしてその一日一日を、戦いを考えて生きるのではなく、**平和な生活を求めて**、その地に家を建て、生きて行く為に必要な耕作をなし、結婚して家庭を築き、数を減らしてはならない。やがての日に、必ず国に帰る事ができ、国を建て上げる事が出来るのです。普通**の幸せを求めて生きて行きなさい**』

と命じました。

神様は捕囚民を訓練されるに、世代を超えた時間を必要とされていました。そこでは自分達を虐げているバビロン人を呪って生きるのではなく、7節に、

「わたしが、あなたたちを捕囚として送った  
**町の平安を求め、その町のために主に  
祈りなさい**」

と命じました。戦争で受ける物心両面の痛手は、そこに敵意と憎しみを生み出し、呪う事によって自分の身を守ろうとしますが、そうする事は一層憎しみを増すばかりで、復讐心を掻き立て、更なる争いを引き起こして行きます。戦いの絶えない時代にあつて、エレミヤは如何にして、人は平和に生きる事が出来るかを、神様に尋ね求めました。それが**自分達を苦しめている人々の平安を神様に祈ること**でした。その町の平安が無ければ、自分達もそこで平安に過ごす事は出来ないのです。捕囚に連れて行かれた集団と言うのは、国創りに役に立つ人ばかりでした。祭司や預言者、占い師もいました。彼らは当時、国の運命を占う重要な人物でした。彼らもまた捕囚民の間に、2年以内の帰還を言い広めていました。エレミヤは彼らに騙されてはいけないと手紙に書いています。

10節に、

「主はこう言われる。

『バビロンに70年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ

戻す』

と約束を伝えました。70年と言うのは、一定の期間を表すのであって、正確な年数を言っているわけではありません。1世代以上が過ぎるまでの時間が必要だと言う事です。ですから、その地に腰を据えて、誰とも平和に生きる生き方を学ばなければなりません。神様ご自身が、ご自分で立てられた計画を良く心に留めていると言っておられます。29章11節で

「それは、平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」と言われました。神様ほど人類の平和を願っておられるお方は居られません。ユダ王国はダビデに約束された、永久の王座が与えられた民でしたが、神様に聴き従わず、神様に背いて来たのです。彼らには悔い改めが必要でした。彼らこそ武力に依らず、神様の御言葉に聴き従い、地上の平安を祈る使命が与えられていました。神様はその様な国に回復するために、彼らをバビロン捕囚に送られたのです。

29章12節から、

『あなたたちが来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば、見だし、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに出会うであろう』と主は言われる」

「わたしは捕囚の民を帰らせる」

と約束されました。捕囚民の中には、エレミヤの言葉によって、神様に心から悔い改め、エルサレム帰還の時を信じ、聖書の編纂にとりくんだ人々がいました。この捕囚の民こそが、

『残りの者、神様の約束を担って行く者』となるのです。紀元前539年遂にバビロニアはペルシャに敗れ、紀元前538年、キュロスの捕囚民解放令によりエルサレム第1回帰還が実現します。そこから神様に聴き従う国作りが始まるのです。バビロン捕囚は紀元前597年から紀元前538年までの59年間でした。

ユダ王国の永久の王座に着くお方として生まれて来られたイエス様は、平和の君としてこの世に来られました。そして、マタイ福音5章43節から、

「あなた方も聞いているとおり、『隣人を愛し、

敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言う。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」

と命じられました。キリスト者に与えられている事は、イエス様の愛を受けて、迫害する者のために、祈る事が出来ることです。

世界に目を向けますと、戦争や紛争、対立が起こっています。私達は余りに小さくて、自分には何も出来ないと諦めてしまいがちですが、祈る事ができます。私達は、この国の為にも、どの国の為にも、平安が宿るようにと、祈る事が出来、また、今、戦禍の中に苦しんでいる人々の為に、

「神様どうぞ助けてください。」

と祈る事ができます。地上にキリストの平和が実現しますようにと、私達は心から祈り、その責任が負わされています。それと同時に、平和を造り出す者となるように、神様の力を求めて行かなければなりません。この事のために、わたし達はその使命に立って祈り続けて参りましょう。

お祈りを致します。

争い憎み合うこの地上に、平和をもたらすために、御子イエス・キリストは、この世に生まれ、その全ての罪を十字架に負って下さいました。

そのイエス様が、敵を愛し、迫害する者の為に祈れと命じられました。私達はその愛に尚遠い者ですが、どうか、隣人を愛し、平和を祈る努めを果たさせて下さい。

今争いのあるところに、どうぞキリストの平和を打ち立てて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。